

あとがき

横浜の野毛山に、築百年を超える日本家屋の豪邸がある。東京と同様に横浜は、関東大震災と太平洋戦争の空襲で壊滅的な打撃を受けたことを考えると、このお屋敷が無傷で明治・大正・昭和・平成と存在してきたこと自体が奇跡のようだと思うのだが、縁あって、そこで、朗読をする機会があった。

以前に伺った折、ご当主にお屋敷の中を案内していただく間、ときどき自分が家のどのへんにいるのか解らなくなった。りしながら、松の梢を揺らす風の音や、客間で談笑する人声が廊下を渡るにつれて大きくなることなどが、身に沁み、家の中と外とが一体でありつつ、この廊下とあの部屋とは隔てられていて繋がってもいる——日本家屋が生み出す独特の音(サウンド)・風景(スケープ)は、私の世代(一九五〇年代生まれ)ぐらいまでの人にとっては、記憶の古層にそれぞれ格納されていて、触発されると次々に呼び覚まされるものだと思う。お屋敷から戻った夜、夢の中に随分昔亡くなった遠い親類が出てきたりした。

朗読の依頼を受けて、すぐさま思い浮かんだのが、内田百閒の「サラサーテの盤」だった。「宵の口は閉め切った雨戸を外から叩く様子がたがた云わしていた風がいつの間にかやんで、気がついて見ると家のまわりに何の音もしない。しんしんと静まり返った儘、もっと静かな所へ次第に沈み込んで行く様な気配である」という書き出しで始まるこの小説は、確信的に耳に訴えてくるテキストである。物語の要にレコードが置かれているの言うまでもないが、客が台所にいる「私」の妻に声をかけ、その妻が「何か御用。水の音でちつとも聞こえませんか」と聞き返すさりげない箇所から、「私」の親友・中砂なかさが芸妓のおふさの微かな訛りにひつかかって後に繋がる縁を拾うところなど、聴き手に耳の緊張を解かせず、一気に

終盤まで連れていく。聴覚に集中させるために、登場人物の姿形といった視覚に訴える情報はことごとく引き算されてもいる。そして聞こえてくる音や声は、木と紙とで出来た家屋ならではの伝わり方／かき消され方をするように描かれている。

私（金井）がお稽古を始めた直後に、逝った中砂の成仏を妨げている一つの要因に、「私」の中砂への思いがあると確信した。中砂という固有名詞が四十一回出てくる。「彼」という三人称を使うなり、主語を省くなりして重複を避ける算段が出来た文章でも、語り手としての「私」は中砂を連呼する。二人の関係をホモ・ソーシャルと名付けることは容易いが、名付けても朗読にはならないから、中砂がおふさをメッセンジャーにして「私」に働きかけるのは、中砂の死を受け入れられない「私」のありようと相関関係を持つ——と仮説を立ててみる。おっとり刀で酒井英行「サラサーテの盤」の虚実「『蟹行』、一九九五・五」や吉川望「サラサーテの盤」論——心象に響く声と音楽「『人文論究』、二〇〇六・二」を読み、わくわくしながら頷いたり首を傾けたりした。

さてこうしている間にも、「自身の読みを打ち出す」作業は、世界のあちこちで文学研究を担う人々の手によって試みられている。第三号（「三号雑誌」と呼ばれるところにまでは辿り付いた！）を迎えた本誌にも、四苦八苦して「新たな読み」を打ち出そうと足掻く論考がひしめいている。しかしながら、研究論文というのは、宿命的に書き手がほぼ読み手であり、書かずに読むだけの「純粹読者」がほとんどない著作物である。書き手は専門がそれぞれ細分化していて異なるので、必然的に精読してくれる読者は限定されたものになる。発表後、何年も経ってから一人、読者が現れたら幸せな方である。自分のこれまでを振り返っても、本誌に論文を掲載している執筆者たちの年齢のころは、朗読のための準備でもないかぎり、論文を書く目的以外で、他の論考に示された「読み」を精読することはほぼ皆無であったと思う。反応のあるなしに関わらず、書き続けるモチベーションを維持するのは容易なことではない。

石牟礼道子は、かつてイバン・イリイチとの対話で、自分は書くときにいつも、「じゃがたら文」を書いて海に流すつも

りで書いていると語っている（「希望」を語る」、河野信子・田部光子編『夢劫の人』、一九九二、藤原書店）。拾って読んでくれる人がいてくれるのは「思いがけないこと」であり、しかし誰が読んでくれるかわからないからこそ、「痛切な気持ち」で書くという。ものを書くことを選んだ人間だれにも響く、書き続ける勇気と初心を忘れない謙虚さを想起させてくれることばではないだろうか。

（金井景子）